

# 生きがい研究に関する一考察

## —生きがい概念の検討と、わが国の青年の生きがいに関する研究の動向—

神田 信彦\*

### A discussion of studies of 'Ikigai': An examination of the concept of 'Ikigai' and trends in the study of 'Ikigai' in Japanese adolescents

Nobuhiko KANDA

This study sought to determine what "Ikigai" means in "Ikigai" research and to discern trends in "Ikigai" research involving adolescents. A clear definition of "Ikigai" is necessary since "Ikigai" typically has a variety of meanings. The relationship between "Ikigai" and similar concepts must also be studied. "Ikigai" research involving adolescents has been categorized into: (1) study of who has "Ikigai" and its origins, (2) study of "Ikigai" and (3) creation of scales to measure "Ikigai."

**Key words** : "ikigai," adolescence, human life

### 問題と目的

生きがい<sup>1)</sup>に関する研究は、心理学、社会学、社会福祉学や医療領域などでさまざまに研究が行われている。研究の対象についてみると高齢期の人々を対象にした研究の数はかなりの割合を占めているようであり、高齢期の人々を対象にした研究のレビューも複数の研究で行われている（長谷川, 2003；鶴若, 2003；柴崎・青木, 2011など）。その一方で、高齢期以外の発達段階の人々を対象にした生きがい研究も学童期から成人期に至るまで行われている。本研究では、研究上の概念としての生きがいについて検討を試みるとともに、青年期の人々を対象に行われてきた生きがいに関する研究を概観することを主な目的とする。

私たちは日々の生活で、悲喜こもごも経験する

が、否定的な経験をできるだけ回避し肯定的な経験を得ようとするのが一般的である。つまり、喜び、楽しみ、満足感や充実感、達成感、爽快感あるいは幸福感に代表されるような感情やそれらに類似する気分を求めようとする。敢えて苦難の道を進む場合にもその過程やそのさきにある肯定的な感情経験を目指していることがしばしばであろう。それらの感情や気分を生きている、生きてきたあるいは生きていくということと結びつけ生きがいと考える場合もあれば、それらの感情や気分をもたらす源泉や対象としても生きがいである。また、心の支えとなるものを意味する場合もあり、さらに生きがいは生きる目的、生きる意味や生きる価値などを含むものとしても語られることもしばしばある。広範な意味を持つ和語であり日常用語である。また、私たちは行政やメディアからの情報の中に生きがいという言葉を見聞きするが、その一方で私たち自身が日常生活の中で生きがいという言葉を会話の中にはさして用いてい

\* かねだ のぶひこ 文教大学人間科学部人間科学科

ないかもしれない。つまり見聞きはするがあまり使用しないことばであるかもしれない理解語として共有している人々も多いことであろう。この意味では不思議な語であるが、生きがいは私たち日本人を理解することに役立つ言葉の一つであるとも考えられる（例えば、神田，2011）。

## 研究上の概念としての生きがい

神谷（1966）は生きがいを、生きがいの源泉や対象としての生きがいとその源泉や対象に関わる感情（上で述べた喜びや充実感など）や認知（しばしば生きがいを感じないときに発せられる自己の生の意味や目的等への問いとして認識される）としての生きがい感の2つに区別し、さらに私たちの中に生きがいを求める7つの生きがいへの欲求があると述べている<sup>2)</sup>。その後の生きがい研究は、神谷の区別に基づいて行われているものが多い。しかし研究対象として生きがいを設定する際には生きがいの定義や意義の扱いは必ずしも同じものとは言えない。生きがいあるいは生きがい感に関する概念の文献的検討は長谷川（2003）、任（2004）、近藤（2007）などによってすでに行われている。

それらとの重複は避けたいが、定義や意義づけの違いは、神谷の挙げた生きがいにたいする7つの欲求（生存充実感への欲求、変化への欲求、未来性への欲求、反響への欲求、自由への欲求、自己実現への欲求、意味と価値への欲求）のどの部分に対応するものであるかという視点から理解することが可能である。

このうち自己実現への欲求や意味と価値への欲求に対応すると判断される考え方を拾ってみると、藤原（1972）によれば、生きがいは対象を持つ、それは状況の変化や本人自身の発達や変化に応じて変化する。「日常生活において一つの目標を追求しそれが達成された場合に、「生きがい」を感じる「生きがい感情」を体験する。「『生きがい』は、個人の持っている中核的な要求に関連し、特に中核的な要求が個人の存在にとっていかなる意味を持っているかということを確認に認識するとき、『生きがい』はいよいよそれと密接に

関連を持ってくる」『『生きがい』とは、自分の存在の本質についての意味を見いだすこと』と述べている。堀内・竹内・坂柳（1983）では、諸研究における生きがい概念は多様であるが、共通項として①生きがいは、幸福という感情、つまり幸福感であるとか充実感といった感情を伴っていること、②人生の目標達成あるいは自己実現のプロセスであることの2点を挙げている。さらに生きがいの内容として①人の和（恋愛など）、②自己実現（スポーツ、仕事、勉強など）、③経済性（貯蓄など）、④社会性（社会奉仕や社会貢献など）を挙げている。上原（2005）は主に神谷（1966）の生きがいについての捉え方を論じた後、生きがいについて以下のような趣旨のことを述べている。生きがいは個人々の価値観に関わる概念であるので多種多様であり、一定の結論を導き出すことは困難である。そのため生きがいを「意識のあり方」つまり「生きがいがある状態」として、さらにこれを満足感、達成感、充実感や幸福感などの「特定の意識のある状態」として最終的に「自己実現の意思」がある状態と見なすことを提案している（なお根本には「生きがい＝自己実現」という視点がある）。そしてこれに具体的な行動を関連づけ、一人称関係（自分のために何かをする）、二人称関係（特定の誰かと共に何かをする/特定の誰かに何かをする）及び三人称関係（他人や社会のために何かをする）を区別している。

その一方で、生存充実感への欲求に対応する捉え方として、高橋（1993）は高齢者との面接から「生きがい感」については、『生きて生活していることに対する充実感』といった程度の認識を筆者は持っている。』とし、さらに「高齢者自身は『生きがいは何か』と聞かれると、「今の生活していく上での楽しみ」と言った意味に、また『生きがいを感じている』ということは、『毎日楽しく、充実感をもって生活している』といった意味で理解しているように思われる。』と述べている。

さらにより素朴な点に注意を払うべきだとし、西村（2005）は、「生きがいは、もともと人々の日常生活の中から生まれてきた言葉であり、抽象的な生きがい議論よりも、各自の日常生活

感覚に沿ってとらえることが、生きがいの本質に迫る上で重要であると考えられる。」と述べている。

最初に述べたように生きがいは、広範な意味を持つ言葉である。そのことは、生きがいがそれをを用いる人によるだけでなく、それが用いられる文脈によってもその意味が異なってくるものであることを考慮しなければならない事を教えている。上述したように生きがいの研究者によって考究・研究の対象として生きがいを捉えている場合には、生きる目的、生きる価値に関係するような意味づけが生きがいに対して行われることも少なくない。著者によってはその人が結論づけた生きがいの意味以外を拒絶するようなことも散見される。例えばそれが“高尚”な意味づけがなされてしまっているような場合には、常識の世界から解離して、われわれには近づきがたいものとして“生きがい”が独歩することになってしまう事にもなりかねない。

もちろん用いられる概念の意味や定義について研究者間で合意が形成されている場合を除き、諸研究においては用いる中心概念や語の意味や定義を明確にしておくことが求められよう。上で見てきたように生きがいの意味、定義や枠組みについては研究者間で一致しているとは言い難い状況である。したがって「生きがい」が多様で広範な意味を持つ概念であるという事実からすれば、言うまでもなく、個々の研究で用いる生きがいという概念の意味や枠組みを明示することは不可欠となる。これらのことを勘案しながら現実の生きがいと遊離することのない生きがい研究を進めなければならない。

近藤(2007)は、生きがい感はいくまでも主観的なものであるという観点から、それまでの多くの研究が「生きがい感」に価値観を持ち込んでしまっていることを批判している。筆者も近藤の観点到賛成ではある。しかし、一般的に自己破壊的あるいは反社会的とされる行為によって得られる「肯定的」な感情や気分生きがい感を見ることにはためらいを禁じ得ない。西村が指摘する「日常の生活感覚」にそった視点で生きがいをとらえることが重要であるように思われる。

なお、生きがいや生きがい感をテーマとする研究でそれらについて定義を明示している研究がどの程度有るかをみると<sup>3)</sup>、先行研究や識者のことばや定義を引用したもの21(例えば、東原, 1981; 塹江, 1988) 国語辞典から引用したもの4(例えば、塩見, 1969; 板垣・渡辺, 2000)、自らの定義を簡略に述べたもの11(例えば、小倉・須貝・小倉, 2008)、調査結果に基づいて定義を行ったもの6(例えば、安藤・和田・田草川, 1974; 近藤・鎌田, 1998)、さらに生きがいの意味や定義について検討を行ったもの6(例えば、高橋, 1993; 西村, 2005)となっている。また、当該の研究での生きがいの定義や意味に全く触れていないもの108となっている。定義や意義に触れていない多くの研究は、基本的には、上述した高橋(1993)や西村(2005)と同様の視点に立っていると考えられ、敢えて明示していないと推測される研究も少なくない。

## 青年期を対象とした生きがい研究

次に青年期の人を対象にした研究を見ると、源泉や対象としての生きがいを専ら扱う研究と生きがい感を専ら扱う研究に大きく分けられる。前者については、生きがい対象の実態を明らかにすることを主目的としている研究が多い。後者については、生きがい感と他の変数との関係の検討を主目的とする研究に分けられる。さらにそれらを測定する尺度を作成しようとする研究がこれに加わる。ここではまず尺度作成に関する研究からみることにしよう。

### 生きがいに関する尺度作成を行った研究

生きがいの源泉や対象を検討にあたって、「生きがいがあるか」たずね、その有無を知る場合、「あなたの生きがいは何か」とたずね、具体的対象を把握する方法が採用されることが一般的である。これに対し吉田(1993)は、「高校生用生きがい尺度」を作成している。大野(1984)の充実感尺度の下位因子構成を参考に生きがいを「生きがいがあるとは、はっきりとした目標が有って、充実感があり、かつ人間関係が良好である」と定

義した上で、「目標」「充実感」「人間関係」の3下位因子8項目からなる「生きがい尺度」を作成している。この尺度は吉田の定義から明らかなように生きがい感も含んでおり、吉田の考える生きがいの個人差を測定しようとするものである。信頼性係数(α係数)が0.7を下回ることや尺度作成の手続きに難があるように思われる。これらの難点が再検討されるのであれば、少ない項目数で生きがいの意味の個人差を補足できるとすれば好ましいことと思われる。

次に生きがい感を調べる場合、1項目だけ用い「生きがいを感じるがあるか、ないか」の2値で行う方法と、生きがい感を測定する複数の項目で構成された尺度を用いる方法とがある。尺度については、岡堂・佐藤・田中・斎藤・山口・千葉(1993)によって翻訳版が作成され、PIL(Purpose in Life)-Aテストが用いられていた。これは、Franklが生きる意味や人生の目的を喪失した人々を対象にするロゴセラピーの立場からCrumbaughとMaholick(1964, 1968)によって作成されたPILテストの邦訳版である。生きがいの用いられ方が広範にわたることを考えると、必ずしも生きがいの全体像の指標とはならないと言えよう。近藤・鎌田(1998)はPIL-Aテストが日本人の生きがい感を測定していないと指摘し大学生を対象にした生きがい感測定尺度を作成した。この尺度の作成過程はかなり周到であり最終的に「現状満足感」「人生享楽」「存在価値」及び「意欲」の4因子31項目で構成される「生きがい感スケール」が作成された。この尺度を構成する項目及び下位因子から近藤・鎌田は現代の大学生の生きがい感を次のように解釈している。「現代大学生の生きがい感とは、自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲を持つ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にもかんじられることがある」、論文の文脈からするとこれが近藤・鎌田の青年の生きがい感の定義であると考えられる。この尺度は、その後の青年期の人を対象とする研究においてしばしば用いられている(例えば、福長・田頭;2004平田, 2010)。しかし、第2因子である「人生享楽」は「娯楽」とする方が妥当と思われる内容の項目で構成されている。また同因

子には「私は心ゆくまで買い物をします」のように感情や認知としての「感」よりその人の行動をたずねているように思われる項目も散見される。

このほか、藤木・井上(2007)は中学生用生きがい感測定尺度を作成。8因子32項目からなる尺度を作成している。明確な記載はないが近藤・鎌田(1998)の定義に基づくものと推測される。

生きがい感を測定する際に回答者が生きがいを持っているかどうかをたずねる必要はないのであろうか。例えば近藤らの「現状満足感」をはじめとする4因子で測定される生きがい感、その人が生きがいの対象や源泉を持っているか、あるいは持っていないかを確認しなければ、その場で経験される肯定的な感情との区別ができないはずである。つまり生きがいの対象や源泉との対応を待たなければ生きがい感を測定することは困難であろう。あるいは、生きがいがあると報告し生きがい感得点の高い人と、生きがいがないと報告して生きがい感が高い人と、生きがいがあると報告して生きがい感が低い人と、生きがいがないと報告して生きがい感も低い人とを区別する要因を検討することも考えられる。

#### 源泉や対象としての生きがいを主に扱った研究

青年期の人の生きがいを実態調査によって把握しようとする研究をみると、岡村・駒崎・大村・花沢(1974)は、中学生、高校生及び勤労青少年2,666名を対象に意識調査を行い、調査対象者の多くは「自らが直接感じられ得るもの(スポーツ、趣味、交友関係など)に生きがいを感じている」と述べている。田部井・武井・田村・二宮・松浦・吉中(1982)は、高校生、短大生及び大学生288名(うち男子37名)を対象に意識調査を行い自由記述によって生きがいについてたずねた。その結果、生きがいがあるとした者は、大学生75.0%、短大生50%、高校生45%であり、クラブ活動など現在の活動に生きがいを感じるとする回答が多かった。また、生きがいの捉え方は充実感、存在感、目的感、意味感などを要件として挙げていた。

熊澤(2005, 2006a, b)は工場の各工程(立位中心、座位中心、多工程)で働く女性新入社員と

経験年数3年以上の女性社員との生きがいを比較している。生きがいの対象として「仕事」「家庭・家族」及び「余暇・レジャー」を用意し、これに順位を付けてもらう方法によってデータを得ている。それらによると女性新入社員は、いずれの工程においても生きがいの第1位は「余暇・レジャー」であった。経験3年以上の女性社員は立位工程では、第1位は「余暇・レジャー」であったが他の工程では「家庭・家族」が第1位となっていた。仕事が生きがいであるとの回答は、いずれも第1位に挙げた人は少なく第3位に順序づけられていた。熊澤（2007）はこれらを総合して女性新入社員の生きがいの第1位は余暇・レジャー、3年以上の経験者は家族・家庭が第1位であったと述べている。熊澤が対象にした工場の各工程で勤務する青年期の女性は、「仕事」ではないものに生きがいを感じていることが示された。さらに「自分に対する生きがい」を基準変数として「仕事」「家庭・家族」「余暇・レジャー」を説明変数として重回帰分析を行い結果を述べているが、重決定係数や標準編回帰係数の記載がない。また「自分に対する生きがい」の意味が不明確である。

神谷・首藤（1980）は勤労青少年男子224名（平均年齢18.1歳）を対象に意識調査を行った。生きがいを感じるものが「わからない」との回答が29.0%と最も多かった。卒業後の「追指導とともに、学校教育において、将来の人生設計や望ましい生き方の確立を援助する進路指導の一層の充実がのぞまれる。」としている。

堀内・竹内・坂柳（1983）は中学と高校生2,440名（男子1,249名、女子1,191名）を対象に①生きがいの実態、②生きがいと進路態度成熟度（自律度、関心度、計画度）、③生きがいと問題傾向化意識（父母、教師、友人から指示された時の暴力欲求の有無）を検討するために質問紙調査を行った。その結果、中学生・高校生とも「何に生きがいを求めてよいかわからない」と回答した割合が40%前後に及び男子より女子でその割合が高かった。生きがいと進路態度成熟度との関連については生きがい有り群と生きがい無し群で一部の学年で有り群が無し群に比較し成熟度が統計的に有意に高いという結果を得ている。また生きがいと暴

力欲求との関係は中学生、高校生ともに一部の学年で無し群が有り群に比較し暴力欲求が統計的に有意に高いという結果が得られた。これをもとに筆者たちは中学生・高校生に対する生きがい教育の必要性を主張している。

藤沢・栗原（1988）は大学生971名（男子797名、女子174名）を対象に自由記述で①現在の生きがいは何か、②将来、何を生きがいとしたいか、③自分の予測寿命は何才か、④自分の望む寿命は何歳か、を自由記述で回答を求め、生きがいについては、3つの基準から分類している。第1は神谷（1966）の「生存充実感への欲求を満たすもの」など7つの欲求による欲求の水準、第2は行動類型（生理的行動型、拘束的行動型、自由行動型）による分類、第3に明確さによる分類（明確、やや不明確、不明確、意味不明、生きがいなし）を行い検討した。その結果、神谷の分類については、現在の生きがいは生存充実感への欲求を満たすものと変化と成長への欲求を満たすものへの欲求が多く、将来の生きがいでは自己実現への欲求を満たすものと生存充実感への欲求を満たすものに多く分類された。行動類型によれば、現在の生きがいは自由行動型（スポーツ、交友関係、学生生活を楽しむなど）、将来の生きがいは拘束的行動型（仕事、子育て、学問など）に多くが分類された。明確さの分類については、現在、将来ともに対象は明確であるが意味内容が不明確なものが多いとして分類している。さらにこれらの各分類と、予測寿命や望む寿命との間に基本的には関連は見られなかった。

青年期の人たちの源泉や対象としての生きがいを扱った研究は1970年代80年代のものが多いため、ここで掲げた結果を現在の青年期の人たちにそのまま適用することには慎重であらねばならず、必要に応じて新たなデータを蓄積することが求められよう。

### 生きがい感を中心に扱った研究

尺度を用いる事なく「生きがいを感じたことがあるか」という問いを設け、生きがい感の有無と他の変数との関係を検討した研究がある。小宮山（1973, 1974）は中学生や高校生を対象に生きがい

い感の有無と時間的展望や生活感情との関係を検討している。

生きがい感を測定する尺度を用いた研究では、生きがい感と、抑うつ、理想自己と現実自己の差異や劣等感など適応や自己認知に関わる変数や生きがいのあり方に関わりのあると考えられる価値観との関係を検討する研究が見られる。

適応や自己認知に関わる変数との関係を検討したのもとして、吉田（1994）は高校生を対象に吉田（1993）の作成した生きがい尺度の得点が抑うつ傾向（SDSで測定）、身体に関する自覚症状及び主観的ストレスがそれぞれ負の関係に有るという結果を得ている。

福長・田頭（2004）は大学生を対象に生きがい感と、現実自己ー理想自己の差異の関係を検討した。近藤・鎌田（1998）の生きがい感尺度のうち「人生享楽」因子に該当する7項目を除く24項目をもとに「現状満足感」「他者からの承認」「将来の展望」の3因子を抽出した。自己の差異については、「外面」「内面」「家族関係」「友人関係」「異性関係」「社会・経済的自立」の6領域について理想自己の内容の自由記述を求め、それらについて現実自己との差異を5件法で評価を求めた。その結果、生きがいの3因子のそれぞれの高得点は理想自己と現実自己の差異と負の相関があることを見出した。さらに3因子の合計得点に基づき生きがい感高群と低群の2群に分けそれぞれについて、生きがい感の3因子を説明変数、自己の差異を基準変数とする重回帰分析を行い、高群においては有意な結果を得なかったが低群においては、3因子が有意な説明力を持つことを見出した。低群においては理想自己と現実自己の差異に3因子が影響を持つことを示した。

熊野（2005）は過去のライフイベント経験を肯定的及び否定的評価と、未来に予測されるライフイベントの肯定的及び否定的評価を測定し、PILAで測定される生きがい感との関係を検討した。達成領域に対する肯定的評価と生きがいとの相関が最も高く、過去の達成及び対人領域に対する肯定的評価を行う人は生きがいが高いという結果を得ている。

柴原（2010）は大学生男女を対象に、生きがい

感と劣等感との関係について検討した。近藤・鎌田（1998）の生きがい感スケールと、西平（1964）の自我態度インベントリーを用い、生きがい感とは才能に劣等感が強まれば低下し、優越感が強まると高くなること、特に才能に関する劣等感情が生きがい感の低下に影響し、社会的側面に関する優越感情が生きがい感を上昇させることを示した。

これらの研究の結果は、基本的には高い生きがい感とは適応や肯定的な自己認知と関連するというものである。しかし、福長・田頭の研究では、生きがい感とは説明変数として取り上げられ、その一方で、柴原による研究では生きがい感とは被説明変数として設定されており、その扱いが異なっている。もし影響の方向を考慮するのであれば、それについて論理的に検討を行った上で分析を行う事が望ましいと思われる。

次に生きがいと価値観との関係を検討した研究をみると、熊野（2003）は生きがいを価値観のプロファイルと関連づけている。価値観の測定は、辻岡・村山（1975）の価値観尺度を用い、得られたデータをクラスター分析しその結果を検討し、外面生活重視の人生観と内面生活重視の人生観の2軸によって生きがいの程度の把握を試みた。その結果、内面的生活と外面的生活をともに重視する人はPILAテストによって測定される「生きがい」得点が高く、内面的生活だけを重視する人は「生きがい」得点が低いという結果が得ている。

大石・安川・濁川・飯田（2007）は、生きがい感と死生観との関係を検討している。死生観として「死後の生仮説」「生まれ変わり仮説」「ライフレッスン仮説」「ソウルメイト仮説」及び「因果関係仮説」を信じる程度を測定し、これらを信じる傾向が高い人はそうでない人に較べPILAテストによって測定される生きがい感が高い事を明らかにし、「死生観のようなスピリチュアルな観点による価値観を持つことが生きがい感を持って前向きに生きていく上で重要である。」と述べている。

青木・鎌田・宮澤（1999）は中山間地域に暮らす若者（高校生）を対象に「地域への定住意向」と「生きがい感」を指標に同地域に住む若者の生活指向を検討した。生きがい感を「生活に充実感

を感じている精神状態」としてPIL-Aテスト（岡堂他, 1993）によって測定した。男女別に見ると女性の方が生きがい感得点が低く、女子は中山間地域での生活に対して悲観的な見方をしていると述べている。また青木・鎌田（2002）は、青木他（1999）で対象にした中山間地域の20代の社会人を対象に調査を行い、彼らが青木他（1999）の高校生サンプルよりも高い生きがい感（PIL-Aテスト得点）を持っていることを明らかにした。また安らぎや四季を感じることでできる自然環境が生きがい感に貢献していることを明らかにしている。

### その他の研究

これらの他、青年期の人の生きがいを直接扱ってはいないが、関連する研究を紹介すると、井上・佐藤（1969）は女子高校生を対象にその職業意識を検討した。自ら職業意識尺度を作成し、その第3因子を「生きがいとしての職業」因子とした。これについて就職組の方が進学組より高い平均得点となった。しかし、「女性でも生きがいを感じられるような仕事を持つべき」という項目は因子負荷量が低く第3因子を構成しておらず、「生きがいとしての職業」という因子名が適切かどうか疑問である。

その他、高齢者の生きがいを充足するための青年の関わり方の可能性を探ろうとする研究（高間・杉原, 2005）や障害者の生きがい支援に関する研究（徳珍・藤田, 2006）などがある。

## 総合的考察

生きがいを鍵概念とする研究では、それをおしすすめる背景に生きがいを持っていることはよいことであり、それが生活上の他の肯定的側面と関連するという仮説が暗黙裡に設定されている。もちろんこの前提は青年期における生きがい研究にも該当する。ここまでみてきたように青年期の人々を対象とする研究自体、それほど多くはないが上述のように心理学的視点による研究が目立つ。その中でも生きがい感と、適応に係わる感情的側面や認知的側面との関係の検討を試みる研究

が行われる方向にあると考えられる。

しかし、それらに先立ちあるいは並行して生きがいという概念について明らかにしておかなければならないことがある。例えば前に指摘したように、生きがいあるいは生きがい感が認知的変数をはじめとする他の変数との関係が検討されつつあるが、それが説明変数として、被説明変数として、あるいは媒介変数として位置づけられるのか、単に相関を持つ変数として位置づけられるのかについて吟味することや概念としての精緻化が必要がある。かつて西平（1979）は当時の青年の「しらけ気分」を考察する中で、「生きがい」をその対立的極に位置づけ、信頼・自立・連帯によってこれらを説明可能であると述べ、当時の青年たちについて「現代日本青年の心情モデル」を提唱している。当時の青年にあつては「生きがい感」の反対傾向は「しらけの気分」として捉えることが可能であったようである。

また概念として類似あるいは強く関連するものとして将来展望がある。青年期は自己形成の時期である。そこではアイデンティティを達成することが大きなテーマ（Erikson, 1950, 1959）であるとされることが一般的であるが、その中に時間的展望を確立することも含まれている。過去、現在、将来の連続性を自分のものとし、将来に対して目標や計画を持って、その実現に向けて現在を生きるということも重要な側面とされる。神谷（1966）は希望を鍵概念として生きがい未来志向性を持つことを指摘しており、前に紹介した近藤・鎌田（1998）の生きがい感尺度でも「将来の展望」が下位尺度を構成している。しかし、岡村ら（1974）、田部井ら（1982）、熊澤（2005；2006ab, 2007）によれば、青年期の人々の生きがいの対象・源泉の中心は、現在行っている活動や関わりである。つまり未来志向性とは直接結びつかない生きがい対象や源泉もあり、将来展望が必須のものではない可能性が考えられる。つまり、将来展望さらには時間的展望は、生きがい対象や源泉を決めることに関連する要因であると考えることが妥当であろう。またこの関係に類似するものとして充実感をあげることができる。

この他、生きがい感に類似する概念として主観

的幸福感がある。主観的幸福感は“psychological well-being”や“subjective well-being”のことである。前者はLawton (1963, 1991) の良好な生活の4要素の一つである。これに①自分自身への基本的満足感、②居場所感及び③明確な現実の受容、で構成されるモラルをも含めてsubjective well-beingとLawtonは提唱している。これに基づき作成された高齢者用の17項目からなるThe revised version Philadelphia Geriatric Center Morale Scale (改訂版PGCモラル尺度; 1975) を作成した。わが国ではこの邦訳版(前田, 1979)が高齢者の生きがい感を測定するためにしばしば利用されている。生きがい感と主観的幸福感(つまり幸福感)は同じものとして扱って良いのであろうか。自分自身への基本的満足感は生きがい感を構成する一つであると考えられる。しかしモラルが高いことが生きがいがあると等しいとはいいがたい。栗原(1983)は生きがいを説明する中で「人の生を鼓舞しその人の生を根拠づけるものを広く指す。」と述べている。仮に生が鼓舞された状態とモラルが高い状態とが等しいとしても、いずれも生きがいがあるもたらしたとは判断できないはずであり、「生きがいがある」あるいは「ない」ということが明確でなければ判断はできない。

したがって、断片だけをとりえて生きがいや生きがい感を検討する事には限界があるといえよう。生きがいの構造や生きがいの過程を踏まえた研究が求められる。

## 注

- 1) 「いきがい」は「生甲斐」「生き甲斐」「生効」「生詮」などと表記されるが本稿では「生きがい」を用いる。
- 2) 宮城(1971)も生きがいを生きがい対象、生きがい感及び生きがい欲求として概念化している。
- 3) 国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNiiによって「生きがい(生甲斐、生きがい)」をキーワードに含む研究を検索し本文をダウンロード可能であった論文を中心に156編の論文を対象にした。

## 引用文献

- 安藤喜久雄・和田光一・田草川僚一 1976 働きがいの構造 駒沢社会学研究 8, 1-16.
- 青木秀幸・鎌田元弘 2002 中山間地域における20代社会人の住み易さ意識と生きがい感からみた生活環境 —農村部における若者の生活実態と農村環境の志向に関する研究 その3— 日本建築学会計画系論文集, 551, 189-196.
- 青木秀幸・鎌田元弘・宮澤鉄蔵 2000中山間及び都市近郊における高校生・20代社会人の生活環境評価の特徴 —農村部における若者の生活実態と農村環境の志向に関する研究 その2— 日本建築学会計画系論文集, 534, 131-137.
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. 1964 An experimental study in existentialism: The psychometric approach to Frankl's Noögenic neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207. (佐藤, 1988からの引用).
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. 1968 Cross-validation of Purpose in Life Test based on Frankl's concepts. *Journal of Individual Psychology*, 24, 74-81. (佐藤, 1988からの引用).
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*, New York: W. W. Norton.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*, New York: International Universities Press.
- 藤木五月・井上祥治 2007中学生の生きがい感体験測定尺度の開発と妥当性 岡山大学教育実践総合センター紀要, 7(1), 125-133.
- 藤沢邦彦・栗原淳 1988 生きがいと寿命に関する意識調査: 某大学一年生の場合 体育科学系紀要(筑波大学体育学系), 11, 305-314.
- 藤原喜悦 1972 生きがいの探求「現代青年心理学講座7 現代青年の生きがい」(依田新・大西誠一郎・齋藤耕二・津留宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰編) 金子書房, 55-103.
- 福長晋也・田頭穂積 2004 大学生における理想自己と現実自己の差異の検討 —生きがい感との関連から— 心理教育相談センター年報, (12), 75-81.

- 長谷川明弘 2003 高齢者における地域別に見た「生きがい」の実証研究 東京都立大学大学院都市研究科博士学位論文
- 平田陽子 2010 青年期における「自立」と生きがい感—心理的自立と対人依存欲求の視点から 九州大学心理学研究 11, 177-184.
- 塹江清志 1988 「生きがい」の原理について：日本的リーダーシップの条件（第2報）日本経営工学会誌 39, 330-336.
- 堀内安男・竹内登規夫・坂柳恒夫 1983 中学生・高校生の生きがいに関する調査研究 進路指導研究, 4, 16-24.
- 任珍永 2004 高齢者の「生きがい」論と高齢者教育・学習 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 52, 189-206.
- 井上健治・佐藤尚子 1969 千葉大学教育学部研究紀要 女子高校生の職業意識（第1部）, 18, 1-11.
- 板垣恵子・渡辺喜勝 2000 現代社会を生きる人々の生きがい 東北大学医療技術短期大学部紀要, 9(2), 257-266.
- 神谷美恵子 1966 生きがいについて みすず書房
- 神谷孝男・首藤太郎 1980 勤労青少年の職業生活への適応と進路指導に関する調査研究 進路指導研究（日本進路指導学会研究紀要）1, 22-29.
- 神田信彦 2011 生きがい考（1）明治時代から太平洋戦争終結までの生きがいの扱われ方 文教大学生生活科学研究所生活科学研究, 33, 111-122
- 小宮山要 1973 青年の意識態度に関する研究（第1報）—中高校生の生きがいについて— 日本教育心理学会総会発表論文集, 15, 190-191.
- 小宮山要 1974 青年の意識態度に関する研究（第2報）—高校生の生きがいについて— 日本教育心理学会総会発表論文集, 16, 28-29.
- 近藤勉 2007 「生きがいを測る —生きがい感てなに？」ナカニシヤ出版
- 近藤勉・鎌田次郎 1998 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究, 11(1), 73-82.
- 熊野道子 2005 生きがいを決めるのは過去の体験か未来の予期か？ 健康心理学研究, 18(1), 12-23.
- 熊野道子 2003 人生観のプロファイルによる生きがいの2次元モデル 健康心理学研究, 16(2), 68-76.
- 熊澤光正 2007 新入女性従業員と経験者の職場意識と生きがいに関する研究 四日市大学論集, 19(2), 79-103.
- 熊澤光正 2006 多工程持ち作業条件のJ社における新入社員と経験者の生きがいに関する研究 四日市大学論集, 18(2), 57-77.
- 熊澤光正 2006 椅子座位作業条件のK社における女性新入従業員と経験者の職場意識と生きがいに関する研究 四日市大学論集, 19(1), 97-118.
- 熊澤光正 2005 立ち作業条件のT社の女性従業員における新入社員と経験者の「生きがい」意識と構成要因に関する研究 四日市大学論集, 18(1), 115-138.
- 栗原彬 1983 いきがい「世界大百科事典 第二巻」小学館.
- Lawton, M. 1975 The Philadelphia geriatric center morale scale: A revision, Journal of Gerontology, 30, 85-89.
- Lawton, M. 1991 A multidimensional view of quality of life in frail elders.: The concept and measurement of quality of life in the fail elderly. Academic Press.
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 1979 老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定を試み 社会老年学, 11, 15-31.
- 西平直喜 1964 「青年分析」大日本図書
- 西平直喜 1979 「子どもの発達と教育6/青年期発達段階と教育3」岩波書店.
- 西村純一 2005 サラリーマンの生きがい対象の構造、年齢差および性差の検討 応用社会学研究, 47, 143-148.
- 小倉毅・須貝静・小倉讓 2008 高齢者のサポート旅行に関する研究（1）中国学園紀要, 7, 21-29.
- 岡堂哲雄・佐藤文子・田中弘子・斎藤俊一・山口

- 浩・千葉征慶 1993 「生きがい」河出書房新社.
- 岡村一成・駒崎勉・大村政男・花沢成一 1974 日本教育心理学会総会発表論文集 16, 310-311.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 佐藤文子 1986 実存心理検査—PIL—の検討I—態度スケールを中心に— 岩手大学人文学部紀要 Artes liberales, 39, 125-140.
- 柴原直樹 2010 大学生における優劣感情と生きがい感の関係 近畿医療福祉大学紀要 11, 153-158.
- 柴崎幸子・青木邦男 2011 高齢者の生きがいに関する文献的研究 山口県立大学学術情報, 4, 121-130.
- 塩見淳一 1969 生きがいの職業的意義 滋賀大学教育学部紀要, 人文科学・社会科学・教育学, 19, 53-60.
- 高橋信行 1993 高齢者に対する生きがい関連項目の検討 鹿児島経済大学社会学部論集, 12, 21-34.
- 高間由美子・杉原利治 2005 若者の意識と実態からみる高齢者の社会参加と生きがい 東海女子短期大学紀要, 31, 79-90.
- 田部井恵美子・武井洋子・田村喜代・二宮喜美恵・松浦久美子・吉中哲子 1982 現代青年の家庭生活観(高校生期を中心として)(第2報)—役割分担と生きがい— 日本家庭科教育学会誌, 25(2), 7-12.
- 徳珍温子・藤田大輔 2006 女子学生・生徒が障害者の「生きがい」支援をどのように意識しているかに関する一考察 大阪信愛女学院短期大学紀要, 40, 1-12.
- 辻岡美延・村山繁 1975 価値観の六次元—因子的真实性の原理による尺度構成— 関西大学社会学部紀要, 7, 161-174.
- 東原昌郎 1981 余暇, 生きがい, 生涯教育に関する一考察 東京学芸大学紀要, 第5部門, 芸術・体育, 33, 195-202.
- 鶴若麻理 2003 語り(ナラティブ)からみる高齢者の生きがい 早稲田大学大学院人間科学研究科博士学位論文
- 上原紀美子 2005 高齢者福祉政策における生きがい論 久留米大学文学部紀要, 5, 13-25
- 吉田勝也 1994 高校生における生きがい尺度の意味と特徴: Zung SDS, 自覚症状および主観的ストレス量との関連において 心身医学, 34(6), 481-487.
- 吉田勝也 1993 高校生における生きがいと進路および将来の職業に対する態度との関連について—生きがい尺度の作成とその検討— ころの健康, 8, 49-57

---

### [抄録]

本研究では、「生きがい」研究における「生きがい」概念のとらえられ方と、青年期を対象とする「生きがい」研究の状況を整理することを目的とした。前者については、「生きがい」は一般的に多様な意味を持つため研究にあたっては明確な定義づけが必要であるが現実から遊離することのないような配慮が必要であること、また類似する他の概念との検討が必要であることを述べた。後者については、青年期を対象とする「生きがい」研究を(1)「生きがい」対象や源泉に関する研究、(2)「生きがい」感に関する研究、及び(3)「生きがい」や「生きがい」感を測定する尺度作成に関する研究に分けて検討を行った。

---